

氏名(本籍)	かね たに まさる 金 谷 優 (鳥取県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第4533号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	Causation and Reasoning: A Construction Grammar Approach to Conjunctions of Reason (因果関係と推論関係 - 理由を表す接続詞の構文文法的研究)
主査	筑波大学教授 文学博士 廣瀬 幸生
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 加賀 信広
副査	筑波大学准教授 博士(言語学) 大矢 俊明
副査	筑波大学准教授 博士(言語学) 島田 雅晴
副査	筑波大学准教授 博士(言語学) 和田 尚明

論文の内容の要旨

本論文の目的は、因果関係と推論関係という観点から、英語の理由を表す接続詞 *because*, *since*, *for* の類似点と相違点を包括的に捉える分析を提案し、それに基づいて、関連する諸現象を統一的に説明することである。具体的には、次の主張を行う。①因果関係は全体でひとつの事象として捉えられるのに対し、推論関係は別々に把握された事象が話者の知識によって関連付けられるものと捉えられる。②この認知構造の違いは言語表現に反映され、因果関係を記述する構文は、主節と従属節でひとつの情報単位と見なされるのに対し、推論関係を記述する構文は、主節と従属節がそれぞれ独立した情報単位と見なされる。本論文は、これらの一般化を、近年注目を集めている構文文法理論の考え方と結びつけて捉えようとする論考である。

本論文は、8章からなる。第1章では、本論文の目的と構成が述べられる。

第2章では、理由を表す接続詞が先行研究でどのように扱われてきたかが概観され、各先行研究の問題点が指摘される。

第3章では、本論文が依拠する構文文法理論の基本的考え方が示される。特に、同理論において、構文全体と構文内の構成素の関係および構文同士の関係がどのように捉えられるかが詳述される。

第4章では、英語の理由を表す接続詞 *because*, *since*, *for* の文法を統一的かつ包括的に捉えるため、「因果構文」「推論構文」という二つの構文スキーマが提案される。前者は因果関係の意味が $[C_2 \textit{because} C_1]$ [*Because* C_1, C_2] のいずれかの形式と結びついたものであり、後者は推論関係の意味が $[C_2, \textit{because} C_1]$ [$C_2, \textit{since} C_1$] [*Since* C_1, C_2] [$C_2, \textit{for} C_1$] のいずれかの形式と結びついたものである (Cは節を表す)。Becauseは両者で用いられるのに対し、*since* と *for* は推論構文でしか用いられない。これらの接続詞が用いられる文の意味的・統語的な類似点および相違点は、接続詞自体の意味によってではなく、それが用いられる構文が同一か否かによって説明されるべきであると主張される。それにより、先行研究で観察されてきた多くの現象を矛盾なく説明することができると同時に、先行研究ではうまく捉えきれなかった問題点も説明可能となることが論じられる。さらに、「継承関係」という概念を用いて、構文間のネットワークを構築することで、それぞれの構文

の類似点と相違点がより鮮明に捉えられることが示される。

第5章では、焦点化副詞による because 節と since 節の焦点化について論じられる。先行研究では、because 節は焦点化できるが、since 節は焦点化できないとされてきた。しかし、この一般化は事実を的確に捉えたものではなく、since 節でも焦点化される例や、because 節でも焦点化されない例が多数存在することが指摘される。この問題を解決するには、まず、焦点化副詞をその意味機能に応じて「排他詞」と「特定詞」と呼ばれる二つのグループに分類する必要があることが論じられる。そのうえで、理由を表す接続詞の焦点化は、焦点化副詞のタイプとそれぞれの接続詞が用いられる構文のタイプとの相互作用により原理的に説明可能となるということが明らかにされる。それによって、構文文法的アプローチによる分析の妥当性がさらに実証される。

第6章では、ある表現 E の使用に対するメタ言語的な理由を表す because の特殊構文 (以下 E-*because* 構文) を取り上げ、それが因果構文・推論構文とどのように関連するかについて考察される。まず、E-*because* 構文の統語的振る舞いを詳細に観察することによって、この構文が因果構文に類似した振る舞いと推論構文に類似した振る舞いを示すということが指摘される。そして、この二面的特徴は、E-*because* 構文が構文間ネットワークにおいて因果構文と推論構文の両方から情報を継承していることによるとして説明される。本章の議論を通して、ある構文を理解する際に、構文間の継承関係という概念がとりわけ重要な役割を果たすことが示される。

第7章では、日本語の理由を表す接続助詞「から」を含む構文と英語の因果構文・推論構文が比較される。日本語の「から」にも、英語の *because* と同様に、因果用法と推論用法がある。第4章で論じられた英語の因果構文・推論構文の性質が日本語においても同様に観察されることが指摘され、これらの構文の性質が日英語に共通であり、英語の *because* に関する構文文法的考察が、少なくとも日英語に関して、通言語的に妥当であることが示される。それにより、英語と日本語では、因果関係・推論関係が同じような仕組みで把握されていることが明らかにされる。さらに、本章の議論を通して構文文法理論における対照研究の必要性が指摘され、その理論的貢献の重要性が論じられる。

第8章は結論で、本論文の主張が簡潔にまとめられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、英語における理由を表す接続詞の用法について、構文文法理論のわく組みに基づき統一的な説明を与えようとするものである。理由を表す関係には、概念的に、因果関係と推論関係の二つがあり、それに対応して、言語的にも理由を表す構文には、因果構文と推論構文という二つの一般的構文型があるとする基本的構想のもと、その構文型が *because*, *since*, *for* の各接続詞とどのように結びつくかを明らかにした点に、本論文の大きな意義がある。

より具体的な成果としては、特に次の四点があげられる。第一に、従来の研究では、*because*, *since*, *for* と個別に扱われていた理由節の文法を、構文文法理論という構文間のネットワークを構築することによって、互いに一定の関係で結ばれているものとして捉えたこと。第二に、様々な理由節の文法的特徴を、因果構文・推論構文という構文自体に帰される性質と各接続詞自体に帰される性質に分けることにより、理由節が関与する言語現象に対して体系的で原理的な説明を与えていること。第三に、焦点化副詞と理由節との共起関係やメタ言語的理由を表す E-*because* 構文などを始めとして、先行研究では十分に扱われてこなかった言語現象を取り上げ、独自の視点から詳細な考察を加え、興味深い一般化を行ったこと。第四に、英語の因果構文・推論構文の性質が日本語の接続助詞「から」を含む構文にも観察されるということを指摘することにより、本論文で提案した構文文法的アプローチが少なくとも日英語において通言語的妥当性を有するもの

であることを示した。以上から明らかなように、本論文は、現代英語の文法研究と構文文法理論に実質的な貢献をするものとして高く評価することができる。

ただし、本論文にさらに求められることとして、次の二点がある。第一に、本論文の根幹をなす考え方として、因果関係は原因と結果が強く結びつき、全体でひとまとまりの関係と捉えられるのに対し、推論関係は別個に把握された二つの事象を話者が主観的に結び付ける過程と捉えられるという仮説があるが、この仮説が言語学的説明において有効に働くことが示されているだけに、その存在意義についてさらに突っ込んだ議論が望まれる。第二に、本論文は理由を表す接続詞の文法現象に構文文法的アプローチが有効であることを示しているが、その有効性をさらに実証するには、理由節だけでなく、それと密接に関係する条件節や譲歩節などにも分析を拡張していくことが今後の課題となる。

学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。